

各関係機関長 殿

岡山県病害虫防除所長
(公印省略)

病害虫発生予察情報について

病害虫発生予報第4号を下記のとおり発表したので送付します。

平成30年度病害虫発生予報第4号

平成30年7月2日
岡山県

予報概評

作物名	病害虫名	発生時期	発生量
水 稻	葉いもち 穂いもち 紋枯病 ヒメトビウンカ 縞葉枯病 ツマグロヨコバイ ニカメイガ セジロウンカ トビイロウンカ 斑点米カメムシ類	やや早 並 並 — — — — — 並 —	並 並 やや多 並 並 やや少 並 やや少 やや少 並 並
モ モ	せん孔細菌病 灰星病 モモハモグリガ ナシヒメシンクイ ハダニ類	— — やや遅 — —	多 並 少 やや少 並
ブドウ	晩腐病 べと病 うどんこ病 フタテンヒメヨコバイ チャノコカクモンハマキ	— — — やや遅 —	やや少 並 やや多 やや少 並
果樹共通	カメムシ類	—	並
キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病 炭疽病	— — — やや遅	やや少 やや多 やや多 やや少
キュウリ・ナス	ミナミキイロアザミウマ	—	やや多
トマト	疫病 葉かび病	やや遅 —	やや少 やや少
(アブラナ科野菜) ダイコン	軟腐病 キスジノミハムシ コナガ	— — —	並 やや多 やや多
野菜共通	ハスモンヨトウ アブラムシ類 モザイク病	並 — —	並 やや多 並
キ ク	白さび病 ハダニ類 アブラムシ類	— やや遅 —	並 並 やや多

1. 普通作物

(水 稲)

(1) 葉いもち

予報内容

発生時期 **やや早**

発生量 **並**

予報の根拠

ア. 6月20～21日の巡回調査によると、葉いもちの初発生確認は平年（6月第6半旬）よりやや早く、発生圃場率は2.2%で平年（2.0%）並の発生であった。

イ. BLASTAM-メッシュ岡山版（以下、ブラスタム）による葉いもちの感染好適条件は、6月20日及び30日に県内で比較的広域に出現した。7月1日までのブラスタムの結果は下表のとおりである。

ウ. 6月28日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、発病を抑制する条件となる。

防除上の参考事項

ア. 補植用の苗は、伝染源となるので処分する。

イ. 箱処理剤を使用していない圃場では、発生を確認後は速やかに防除を行う。箱処理剤を使用している圃場で発生を確認した場合は、箱処理剤と同系統の薬剤の使用を避ける。

ウ. 現時点で未発生圃場でも耐病性の弱い品種（コシヒカリ、あきたこまち、ヒノヒカリ、朝日）は初発後の病勢の進展が速いので、早期発見、早期防除に努める。

エ. 本病は、曇雨天日が多い場合に発病が助長されるので今後の気象に注意する。

表 アメダスデータから推測される葉いもちの感染好適条件の出現状況

(BLASTAMメッシュ岡山版)

地帯区分	北部地帯					中部地帯					南部地帯				
	上長田	千屋	奈義	古町	新見	久世	津山	福渡	和気	高梁	岡山	虫明	倉敷	笠岡	玉野
6. 15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
20	○	—	●	○	○	—	●	●	●	●	—	●	●	●	—
21	—	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—	—	—	—	●
22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
27	—	●	●	●	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—	●
28	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
29	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
30	●	—	●	●	—	—	—	—	●	○	—	●	○	—	●
7. 01	●	—	—	—	—	●	●	—	—	—	—	—	—	—	—

●：感染好適条件 ○：準感染好適条件 —：感染好適条件は現れなかった

(2) 穂いもち (極早生種対象)

予報内容

発生時期 並
発生量 並

予報の根拠

- ア. 極早生種の生育は概ね平年並である。
- イ. 6月20～21日の巡回調査では、葉いもちの発生圃場率は2.2%で平年(2.0%)並の発生であった。
- ウ. BLASTAM-メッシュ岡山版(以下、ブラスタム)による県中北部における葉いもちの感染好適条件は、6月20日及び30日には比較的広域に、6月21日、27日及び7月1日には一部地域で出現した。6月28日までのブラスタムの結果は下表のとおりである。
- エ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、発病を抑制する条件となる。

防除上の参考事項

- ア. 本病は、曇雨天日が多い場合に発病が助長される。

(3) 紋枯病

予報内容

発生時期 並
発生量 **やや多**

予報の根拠

- ア. 6月20～21日の巡回調査では、平年同様発生を認めなかった。
- イ. イネの茎数は概ね平年並で推移している。
- ウ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、やや発病を助長する条件である。

(4) ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容

ヒメトビウンカ(第2世代幼虫)

発生量 並

縞葉枯病

発生量 並

予報の根拠

- ア. 赤磐市の予察灯における第1世代の初誘殺は6月2半旬で平年(6月2半旬)並であった。6月1～5半旬の飛来数は1頭で、平年(9.2頭)より少なかった。
- イ. 6月20～21日の巡回調査におけるすくい取り調査(20回振り)による発生圃場率は57.1%で平年(45.9%)よりやや高く、1地点あたりの成幼虫発生量は1.6頭で平年(2.2頭)並であった。
- ウ. 近年の県南部における縞葉枯病の発生は、平年並で推移している。

(5) ツマグロヨコバイ(第2世代幼虫)

予報内容

発生量 やや少

- ア. 赤磐市の予察灯における第1世代の初誘殺は6月1半旬で平年(6月1半旬)並、6月1～5半旬の飛来数は4頭で、平年(88.0頭)より少なかった。
- イ. 6月20～21日の巡回調査における見取り・払い落とし調査による発生圃場率は9.5%で平年(8.9%)並であった。
- ウ. 6月20～21日の巡回調査におけるすくい取り調査(20回振り)では、成幼虫の発生量は0.3頭で平年(1.1頭)よりやや少なかった。
- エ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水

量は少ないとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

防除上の参考事項

ア. ツマグロヨコバイが媒介する萎縮病は、近年巡回調査において発生を認めていない。

(6) ニカメイガ (第1世代幼虫)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおいて6月5半旬までに平年同様誘殺を認めていない。

(7) セジロウンカ

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月20~21日の巡回調査における見取り・払い落とし調査による発生圃場率は0%で平年(6.2%)より低かった。

イ. 6月19~22日の巡回調査におけるすくい取り調査(20回振り)では、1地点あたり成虫発生量は0頭で平年(1.1頭)よりやや少なかった。

ウ. 赤磐市の予察灯における6月1~5半旬の飛来数は0頭で、平年(11.1頭)より少なかった。

エ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(8) トビイロウンカ

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市及び真庭市の予察灯において平年同様6月5半旬までに飛来を認めていない。

イ. 6月20~21日の巡回調査において発生を認めなかった。

(9) 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における6月1~5半旬の誘殺数は46頭で平年(56.8頭)よりやや少なかった。

イ. 6月27日の県北部イネ科牧草地のすくい取り調査(20回振り)では、アカスジカスミカメの発生量は1地点当たり29.9頭で平年(23.5頭)よりやや多かった。

ウ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

防除上の参考事項

ア. イネ科植物の穂は餌であり、産卵場所でもあるため、水田周辺のイネ科植物は除去する。ただし、穂の付いたイネ科植物をイネの出穂2週間前から出穂後3週間の間に除去すると、カメムシを水田に追いやることになるので避ける。

2 果 樹

(モ モ)

(1) せん孔細菌病

予報内容

発生量 多

予報の根拠

- ア. 6月22日の巡回調査によると、発生圃場率は67.6%で平年(16.8%)より高かった。
- イ. 県南部の7月下旬のモモせん孔細菌病の発生助長要因である「昨年の8月中旬の発生ほ場数」は多い(岡山県病害虫防除所調査)。
- ウ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、発病を抑制する条件ではあるが、風雨によって発病が助長されるので、気象変化に十分注意する。

防除上の参考事項

- ア. 次作における伝染源量を減少させるために収穫後の防除を徹底する。

(2) 灰星病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 県予察圃場における6月26日の幼果の発病果率は35.8%で、平年(8.9%)より高かった。
- イ. 4月下旬の巡回調査では花腐れの発生圃場率は平年よりやや高かったが、6月22日の巡回調査では果実での発生は認めていない。
- ウ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、発病を抑制する条件である。

(3) モモハモグリガ(第3世代幼虫)

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 少

予報の根拠

- ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は0頭で、平年(63.7頭)より少なかった。
- イ. 6月22日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年(3.5%)より低かった。
- ウ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(4) ナシヒメシンクイ(第3世代幼虫)

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

- ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は0頭で、平年(14.3頭)より少なかった。
- イ. 6月22日の巡回調査における新梢被害発生圃場率は21.6%で、平年(17.6%)並であった。
- ウ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(5) ハダニ類

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月22日の巡回調査における被害発生圃場率は24.3%で、平年(24.0%)並であった。
- イ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(ブドウ)

(1) 晩腐病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月の降水量は平年よりやや少なかったことから、幼果の感染は平年よりやや少ないと考えられる。

イ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、発病を抑制する条件である。

防除上の参考事項

ア. ベノミル剤(ベンレート)及びアゾキシストロビン剤(アミスター)に対して感受性が低下した耐性菌が本県各地で確認されている。

(2) ベと病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 県予察圃場では、平年(6月22日)よりやや遅い6月25日に初発生が認められた。

イ. 6月22日の巡回調査において発生圃場率は21.4%で、平年(13.5%)よりやや高かった。

ウ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、発病を抑制する条件である。

防除上の参考事項

ア. 梅雨時期の連続降雨により急に病勢が進展する可能性がある。

イ. ブドウベと病に登録のあるストロビルリン系殺菌剤(アゾキシストロビン剤、クレソキシムメチル剤、ファモキサドン剤)に対する耐性菌が本県の一部で確認されている。本系統の殺菌剤の使用は1作期1回とし、他系統の殺菌剤と組み合わせて使用する。

(3) うどんこ病

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 6月22日の巡回調査において発生圃場率は14.2%で、平年(2.1%)より高かった。

イ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、降水量は少ないとされており、発病を助長する条件である。

(4) フタテンヒメヨコバイ(第2世代幼虫)

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月22日の巡回調査において発生を認めず、発生圃場率は平年(1.3%)より低かった。

イ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(5) チャノコカクモンハマキ(第2世代幼虫)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は2頭で、平

年(3.3頭)並であった。

イ. 6月22日の巡回調査では平年同様発生を認めなかった。

ウ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(果樹共通)

(1) カメムシ類 (チャバネアオカメムシ)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における4月～6月5半旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は63頭で平年(99.1頭)よりやや少なかった。

イ. 赤磐市のフェロモントラップにおける4月～6月5半旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は、242頭で平年(363.6頭)より少なかった。

ウ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

3. 野菜

(キュウリ)

(1) ベと病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場(5月8日定植)の発病葉率は0.2%で平年(23.7%)より低かった。

イ. 6月26、27日の巡回調査によると、発生圃場率は33.3%で平年(54.0%)より低かった。

ウ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、発病を抑制する条件である。

(2) うどんこ病

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 県予察圃場(5月8日定植)において、発病葉率は30.6%で平年(3.8%)より高かった。

イ. 6月26、27日の巡回調査によると、発生圃場率は66.7%で平年(60.4%)よりやや高かった。

ウ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、特に発病を助長する条件ではない。

(3) 褐斑病

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 県予察圃場(5月8日定植)において、平年同様発生を認めなかった。

イ. 6月26、27日の巡回調査によると、発生圃場率は33.3%で平年(21.2%)より高かった。

ウ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、特に発病を助長する条件ではない。

(4) 炭疽病

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場（5月8日定植）において、平年同様発生を認めなかった。

イ. 6月26、27日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年（4.0%）並であった。

ウ. 6月28日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、発病をやや抑制する条件である。

（キュウリ、ナス）

（1）ミナミキイロアザミウマ

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 6月26、27日の巡回調査によると、露地、施設栽培のナス及びキュウリでの発生量は平年並であった。

イ. 6月28日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

（トマト）

（1）疫病

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月26、27日の巡回調査によると、県南部の露地栽培及び県北部の雨除け栽培では発生を認めず、発生圃場率は平年（8.3%）よりやや低かった。

イ. 6月28日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、発病を抑制する条件である。

（2）葉かび病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月26、27日の巡回調査によると、発生圃場率は25.0%で、平年（28.2%）並であった。

イ. 6月28日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、発病を抑制する条件である。

防除上の参考事項

ア. 本病の初発生時期（雨除け栽培トマトでは6月下旬～7月上旬）と病勢進展時期（7月下旬～8月上旬）に効果の高い殺菌剤を予防散布する防除体系は、葉かび病の防除に有効である。

イ. 一部地域で Cf-9 を持つ抵抗性品種を侵すレースが確認されているので、発生を認めた場合には速やかに防除対策をとる（平成22年度植物防疫情報第4号参照）。

ウ. 本県では、トマト葉かび病に類似した病徴を示すトマトすすかび病の発生が認められている。肉眼での判別は困難であるが、顕微鏡下で観察すれば、トマトすすかび病菌の分生子が細長い形状であることから葉かび病とは容易に区別できる（平成18年度病害虫発生予察特殊報第2号参照）。

（アブラナ科野菜）

（ダイコン）

（1）軟腐病

予報内容

発生量 並
予報の根拠

- ア. 6月26日の巡回調査によると、発生圃場率は25.0%で平年(20.8%)よりやや高かった。
イ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、特に発病を助長する条件ではない。

(2) キスジノミハムシ

予報内容
発生量 **やや多**
予報の根拠

- ア. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(3) コナガ

予報内容
発生量 **やや多**
予報の根拠

- ア. 6月1～5半旬の県予察圃場(赤磐市)におけるフェロモントラップへの誘殺数は30頭で、平年(16.7頭)よりやや多かった。
イ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(野菜共通)

(1) ハスモンヨトウ

予報内容
発生時期 並
発生量 並
予報の根拠

- ア. 6月1～5半旬の県予察圃場(赤磐市)のフェロモントラップの誘殺数は17頭で、平年(70.8頭)より少なかった。
イ. 6月26、27日の巡回調査によると、ナス、トマト、キュウリでの発生は認められず、発生圃場率は平年(0%)並であった。
ウ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(2) アブラムシ類とアブラムシ伝搬性のモザイク病

予報内容
発生量 アブラムシ類 **やや多**
モザイク病 並

予報の根拠

- ア. 6月1～5半旬の県予察圃場(赤磐市)の黄色水盤への飛来数は979頭で、平年(256.4頭)より多かった。
イ. 県予察圃場(赤磐市)における6月下旬のキュウリでのアブラムシ類の発生量は平年よりやや多かった。モザイク病は、平年同様発生を認めなかった。
ウ. 6月26、27日の巡回調査では、アブラムシ類の発生量はキュウリでは平年並、トマトでは平年よりやや少なかった。モザイク病の発生圃場率は、キュウリでは0%(平年12.2%)、トマトでは12.5%(平年19.6%)でいずれも平年より低かった。
エ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖をやや抑制する条件である。

防除上の参考事項

- ア. モザイク病の発病株は伝染源になるので早めに除去し、アブラムシ類の防除を行う。

4. 花 き

(キ ク)

(1) 白さび病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月27日の巡回調査によると、発生圃場率は25.0%で平年(13.6%)より高かった。

イ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、発病を抑制する条件である。

(2) ハダニ類

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月26、27日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年(7.5%)より低かった。

イ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(3) アブラムシ類

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 6月1～5半旬の県予察圃場(赤磐市)の黄色水盤への飛来数は979頭で、平年(256.4頭)より多かった。

イ. 6月26、27日の巡回調査によると、発生圃場率は22.2%で平年(16.0%)並であった。

ウ. 6月28日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温は高く、降水量は少ないとされており、本虫の増殖をやや抑制する条件である。

この情報は、岡山県病害虫防除所ホームページでも公開しています。アドレスは、
http://www.pref.okayama.jp/soshiki/kakuka.html?sec_sec1=239 です。

